神戸新聞 夕刊 2026年5月27日

日銀神戸

支店長の視点

別所昌樹氏

ある国際金融人が遺した宝物

子供の頃から郵便切手を集めています。齢を経るにつれ関心は「郵便物」に広がりました。封書やはがきの上の切手、消印、逓送経路、料金、郵便制度といった要素を読み解く面白さがあるからです。主な収集対象は両大戦間期の日本発の外国郵便。黎明期の航空郵便は、同じ宛先国でも経路により料金が異なる複雑な体系でした。船便も、外国航路客船の絵はがきに船内の郵便局で消印されたものからは往時の船旅の優雅さを感じます。

そうして集めた中に、東京からロンドンに宛てた一通の航空書状があります。東京の消印は1939年7月3日。貼られた切手の料金などから、香港まで船、そこからペナンまで航空機、次に陸路でシンガポール、再び航空機で運ばれ7月14日にロンドンに届いたことがわかります。

宛先は英文で、横浜正金銀行気付の「子爵H KANO」とタイプされています。当時の同行ロンドン支店長・加納久朗子爵です。日中戦争で日本が孤立に向かう中、駐英大使の吉田茂とともに日英関係の維持に動いたことで知られる人物ですが、国際決済銀行の理事会副議長も務めていました。また戦後、神戸銀行が外国部を設けた際、加納氏が相談相手となり親身に応援したことを、当時の岡崎忠頭取が著書に書き残しています。

私にとってロンドンは、かつて駐在した思い出の地です。第1次大戦のドイツの賠償金を扱うためにできた国際決済銀行は中央銀行間の協力の場でもあり、これまで幾度となくバーゼルの本部に出向く機会がありました。ロンドン、バーゼル、そして神戸への思いと、国際協調を切望し行動した金融の先達への敬意を呼び起こすこの一通の封筒は、私のひそかな宝物です。